

令和 7 年度企画展

くらしの中の昔の道具

～五感で感じる涼の工夫～

令和 7 年 7 月 23 日 (水) ～11 月 9 日 (日)

高温多湿で、気候的に過ごしづらい日本の夏。かつては、風鈴を軒先に下げたり、夜は蚊帳を吊って眠るなど、五感で涼を感じる工夫がくらしのそこかしこにありました。現在、夏の暑さはさらに厳しくなり、1980 年代から家庭用ルームエアコンが急速に普及したことにより、そのような光景は見かけられなくなりました。

本展示では、かつて夏のくらしの中で使われた日本ならではの道具と旭の風物詩を紹介します。

風物詩～海水浴

海水浴の始まりは、潮湯治しおとうじと呼ばれる治療法といわれています。明治 20 年代(1887～)から保養を目的とした海水浴が広まり、九十九里海岸の北端に位置する旭市の海岸沿いは、大正末期から昭和初期には東京方面にも景勝地として知られ、名士の別荘も建てられました。昭和 10 年(1935)には九十九里自然公園に指定され、観光地として知られていきます。戦後、生活が落ち着き始めた昭和 30 年代(1955～)ごろから再び海水浴客が増えはじめ、飲食店や民宿が立ち並ぶようになりました。



賑わう飯岡海水浴場 昭和期

一方で、九十九里海岸は長い間、波や海流によって海岸線が削られ、砂浜や陸地が後退してしまう海岸浸食に苦しめられてきました。明治 30 年(1897)に県営工事として下永井地先に波よけが施工され、本格的な護岸工事が始まります。昭和 3 年(1928)には約 9 年をかけて行われた巨大コンクリート構造の護岸の築造には、延べ 3 万人が工事に携わりました。その後も、海岸浸食は一進一退を繰り返し、昭和 50 年(1975)から高潮対策事業として離岸堤の設置が進むと、砂浜が徐々に回復しました。平成 12 年(2000)には護岸工事竣工記念として、碑が建てられます。しかし、平成 23 年(2011)の東日本大震災の発生など苦難は続き、令和 2 年(2020)から九十九里浜全域を対象とした「九十九里浜浸食対策計画」が 30 年計画で進められています。美しい海岸を守るための努力は、今も続いています。

風物詩～旭市七夕市民まつり

旭市の七夕まつりは、旧旭市制が始まった翌年の昭和 30 年(1955)に「中央商店街七夕まつり」として始まり、七夕飾りを商店街の各家が作り、店先へ飾りました。昭和 40 年(1965)には、市全体のまつりに拡充し、各地区の神輿やお囃子、踊りやパレードなどが行われ、市民が参加する夏祭りとして定着しました。毎年、10 万人もの人が訪れるお祭りです。



ミス七夕コンクール 昭和 48 年



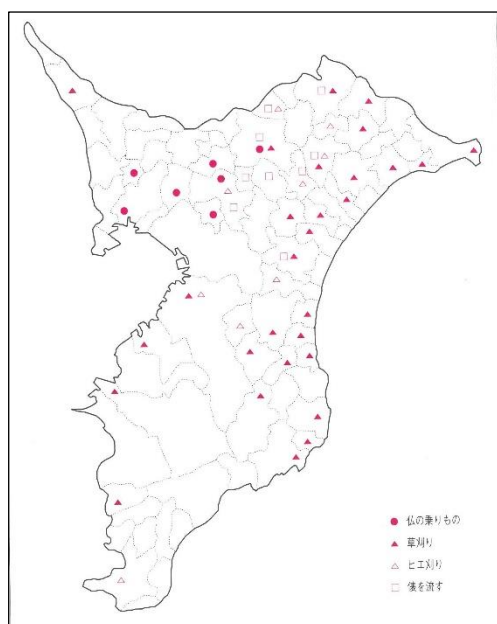
旭市の七夕まつり 昭和 60 年

なかでも昭和 43 年(1968)から開催され、七夕まつりに華を添えているミス七夕コンクールは、第 50 回(2017)からはミスあさひコンテストと名称を変え、選ばれたミスあさひが 1 年を通して旭市のPR活動を行っています。令和 7 年(2025)の七夕市民まつりは、8 月 6 日(水)・7 日(木)です。



旭市の七夕まつり 平成 4 年頃

風物詩～七夕馬



かつて七夕馬を飾っていた地域
(『千葉県歴史 別編 民俗Ⅰ』より)

7 月 7 日の七夕は、笹の葉に願い事を書いた短冊を下げて軒下に飾り、彦星と織り姫の伝説のある天の川を見上げる星祭りとしての七夕行事が一般的です。各家や学校のほか商店街などでも大々的に行われている夏の風物詩です。

旭市域では星祭りの七夕のほか昭和 30 年代(1955～)まで、農業および盆に係る七夕行事も広く行われていました。これは藁や真菰などで作った馬や牛の七夕馬に、七夕の朝子供たちが刈り取った草を縛りつけて家まで引いて帰り、刈ってきた草を庭に敷いて七夕馬を置き、そこに素麺や饅頭などを供え、その後、七夕馬を屋根に飾ったり川に流したりした行事です。これは当時の農作業には欠かせなかった牛馬を慰労することと、かつて七夕が盆の一週間前の行事だったので、七夕馬は先祖を迎える乗り物だと考えられていたことなどが背景にあります。

七夕馬は関東各地で作られていました。旭市周辺では胴体に縄を巻き付ける型が多く、馬は頭を三つ編みにして田植えの際に残しておいた苗をたてがみ 鬘たてがみに使い、小型の牛と対で飾りました。

昭和 30 年代の高度経済成長期に星祭りとしての七夕は地域の祭りとして拡大し学校行事でも開催されるようになりますが、農業・盆行事としての七夕は、農作業から馬や牛の姿が消えてゆくのに伴い行われなくなりました。



七夕祭り 昭和 35 年 旧小見川町 撮影：藤城昭

風物詩～盆

江戸時代まで日本全国の盆は旧暦の 7 月の行事でした。明治 6 年(1875)に暦が新暦になって以降、盆行事も新暦の 7 月に移りました。しかし時期としてはそれまでより約 1 か月前にあたるので、季節的に合わないことなどの理由から、盆行事は 1 か月後に移り、新暦の 8 月の行事として定着しました。

旭市域では 8 月 13 日に先祖の霊が家に戻ってくるとされ、夕方になると各家では迎え火を焚きます。そして仏壇には盆棚を飾り、毎日お供え物をあげます。また、盆の最中は先祖が田んぼや畑を見回ってくれているので、野良仕事に出てはいけないとも言われます。そして 8 月 15 日か 16 日には送り火を焚き、なす 茄子や きゅうり 胡瓜などを細かく刻んで米を混ぜた供物などを真菰まこもで編んだ盆船に乘せて川へ流しました。

盆と一連の行事として行われていた七夕行事は、新暦 7 月になって盆との間隔が 1 か月空くようになると、盆との関連性は薄くなり先祖迎えの七夕よりも星祭りとしての七夕が主流となっていきました。千葉県では茂原市と旭市の七夕祭りが有名ですが、茂原市は 7 月、旭市は 8 月に開催します。時期が異なるのも七夕と盆との関係に地域による違いがあったからなのでしょう。



学校の七夕飾りを海に流す 昭和期 旧飯岡町

旭市域の夏祭り～祇園・エンヤーホー～

旭市では、夏の祭りとして七夕市民まつりを大々的に開催しますが、市内の各地で祇園祭りも行われています。

祇園祭は京都・八坂神社の祇園会が本来の祭礼ですが、旭市周辺では神社の夏の祭礼を祇園祭と呼んでいます。祇園



万歳地区の祇園祭り 昭和27年 撮影：藤城昭

では祭囃子を先導に神輿を担いで地域を巡行します。祭囃子の曲目は

サンギリ、ヤマト、イソベ、アンバ、ハヤバカなどがあります。

祇園祭りのなかでも、旭市太田地区の 八坂神社ではエンヤーホーという舞が演じられます。これは関東各地で行われている「つく舞」という祭礼の一つで、獅子や鹿、鶴、かまきり、みみずくなどが舞台上で無言劇を演じ、その後「つく柱」に獅子が登って高所で曲芸を行う、子孫繁栄や五穀豊穡を願った祭りです。県の無形民俗文化財に指定されています。かつては網戸の八重垣神社や鐺木の須賀神社でも同様な行事が行われていたと伝えられています。



太田のエンヤーホー 令和5年

涼、いろいろ～衣～

夏祭りや花火大会では、浴衣を着て楽しむ人の姿を多く見かけます。浴衣の語源は「湯帷子」という平安時代に貴人が湯あみをする際に着用した簡素な衣類のことで、麻製で肌へ直接着用しました。

江戸時代中期ごろになると、麻より吸水性の高い木綿の浴衣が普及し、銭湯の湯上りや夕涼み、花火見物など、夏の夜の外出着として親しまれました。浴衣の模様にも様々な趣向が凝らされるようになりました。白地に藍の染め抜きなど、涼やかなものが好まれました。

かつては、浴衣を日中の外出着に用いることは稀で、外出の際は襦袢に単衣^{*1}の着物をあわせました。特に暑い7月～8月は、^ろ紗や^{しよ}紗など薄手の着物を着用しました。

また、身に着ける小物類も涼を呼ぶ重要なアイテムでした。男性は帽子、女性は日傘などで日差しを遮り、扇子や団扇^{うちわ}をあおいで涼をとりました。現在は、さらに高性能の商品が販売され、ハンディファンを片手に持って歩く姿もよく見かけます。



『両国夕涼みの図』 江戸期 国立国会図書館蔵

涼、いろいろ～食～

家に帰ると、真っ先に冷蔵庫を開け、冷えた飲み物やアイスに手が伸びてしまう——暑い季節に欠かせない冷蔵庫は、昭和 30 年代(1955～)の高度経済成長期に三種の神器*2の一つとして家庭へ普及しました。では、それ以前はどのように食べ物を夏の暑さから守ったのでしょうか？

氷冷蔵庫は、明治時代の終わりにから電気冷蔵庫の普及する昭和 30 年代まで、都市部を中心に使われました。当時は食べ物を買うと、その日のうちに食べきるか、すぐに火を通して傷みにくくしていました。また、夏は井戸や川の水にスイカやトマトを浸して、冷やして食べました。井戸水は年間を通じて水温が一定で、夏場は外気温との差から、ほどよく冷やすことができました。

また、甘味処や駄菓子屋で食べるかき氷や心太^{ところてん}も楽しみの一つでした。かき氷を家庭で楽しめるようになったのは、昭和 30 年代に冷凍庫付き冷蔵庫が発売されてからのことです。の強い絆を示すものです。



スイカの特産化に取り組んだ飯岡町 昭和 49 年 撮影：藤城昭

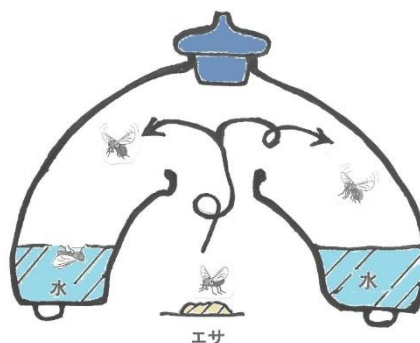
蠅とのたたかい

蠅という文字を使って五月蠅^{うるは}いと読むように、初夏の頃から食卓の周りを飛び回る蠅は何かと煩わしいものです。江戸時代の日本では身近な虫として存在していましたが、明治時代になると蠅はコレラなど病原菌を運ぶ害虫ということが広く知られるようになり、大正時代には蠅の駆除が叫ばれました。殺虫剤のほか蠅を退治するのにさまざまな道具が使われました。最も一般的なのは蠅が止まったところを叩く蠅たたきです。かつてはシュロの葉を編んで作ったものが使われましたが商品として金網製の物が登場し、今ではプラスチック製の蠅たたきが主流です。

蠅たたきのほかに蠅を捕まえるものとして糊^{のり}のついたテープを吊り下げる蠅取りリボンのほか、蠅が真上に飛べない習性を利用してガラス管の中に落とす蠅取り棒や蠅取り瓶^{びん}なども使われました。



蠅取り瓶 千葉県立中央博物館蔵



蠅取り瓶の使い方

食べ物にハエがつかないように、網戸を付けた小さな棚に入れる蚊帳やネット状の籠を食べ物の上に被せて、蚊がつかないように工夫もしました。昭和 30 年代(1955～)に「蚊と蠅のいない生活実践運動」が国民運動として実施されました。令和になっても蚊は五月蠅く飛び回っており、これからも人と蚊との戦いは続きそうです。

涼、いろいろ～住～

「家のつくりやうは夏を旨とすべし」と兼好法師が綴ったように、室内を冷やす術のない時代に建てられた家屋には、夏の暑さをしのぐための様々な工夫があります。茅葺き屋根の農家建築では、^{ひさし}庇を大きく設けることによって雨や日差しから家を守り、内部の環境を調節するという働きがありました。他にも、^{すだれ}簾や^{よしず}葦簾を使って日差しが直接室内へ入ることを避けてました。

また、^{しょうじ}障子や^{ふすま}襖などの可動式の仕切りを使うことで風通しをよくし、夜には^{なげし}長押に^{かや}蚊帳を吊ってその中で眠るなど、外からの涼しい風をうまく取り込む工夫がありました。昭和 30 年代(1955～)からアルミサッシが普及したことにより、窓と網戸が付いた建物が主流になると、蚊帳は次第に使われなくなりました。

ほかに、庭先へ水を撒いて蒸発する際の気化熱を利用する打ち水をしたり、軒先や窓辺へ風鈴を下げて涼しげな音色を楽しんだりしました。

昭和 50 年代(1985～)から家庭用ルームエアコンが急速に普及したことにより、現在では涼しい空気を外へ逃がさないために高气密高断熱の住宅が建てられています。



『絵本四季花 上』寛政 13 年 国立国会図書館蔵

急な雨に男性は雨戸を取り付け、女性は蚊帳を吊る。

かつては蚊帳が雷除けになるという迷信が信じられていた。

*1 裏地のない着物 *2 昭和中期に普及した家電製品。白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫

◆展示協力者一覧(五十音順・敬称略)

【機関・団体】 国立国会図書館 千葉県立中央博物館

【個人】 菅谷茂正 菅谷信治 菅谷順司 菅谷美代子 高木忠一 高橋貞雄 橋本愛 藤城昭 亘登志雄

展示資料目録

※会期中、展示替えがあります

企画展示室

No.	資料名(年代 / 素材 / 使用地 横線は購入)	提供 (敬称略)
1	虫かご (昭和期 / 竹 / 旭市)	旭市教育委員会
2	昆虫セット (昭和期 / 箱:紙 本体:ガラスほか / 香取市)	亙登志雄贈
3	虫取り籠 (令和期 / プラスチック / —)	個人蔵
4	暑中休暇日記 (昭和3年 / 紙 / 旭市)	菅谷順司託
5	七夕馬 (昭和期 / マコモ 稲わら 稲苗 / 成田市土屋)	千葉県立中央博物館
6	七夕馬 (昭和期 / マコモ 稲わら 稲苗 / 成田市カ)	千葉県立中央博物館
7	七夕馬 (昭和期 / マコモ 稲わら 稲苗 / 成田市土屋)	千葉県立中央博物館
8	七夕馬 (昭和期 / マコモ 稲わら 稲苗 / 成田市土屋)	千葉県立中央博物館
9	エンヤーホー(だんな) (昭和期～平成期 / 竹、紙ほか / 旭市)	旭市教育委員会
10	盆舟(丸型) (昭和期 / マコモ / 香取市周辺)	千葉県立中央博物館
11	扇風機 (昭和期 / 本体:金属 リモコン:プラスチック / 香取市周辺)	千葉県立中央博物館
12	扇風機 (昭和期 / 本体:金属 プラスチック / 香取市)	個人蔵
13	蚊帳 (昭和期 / 麻ほか / 旭市)	館蔵
14	風鈴 (昭和期 / 鉄 / 旭市)	高橋貞雄贈
15	籐製の木馬 (昭和期 / 籐 / 銚子市)	個人蔵
16	籐製の椅子 (昭和期 / 籐 / 銚子市)	個人蔵
17	扇子 (令和期 / 紙、竹 / —)	個人蔵
18	サングラス (昭和期 / レンズ:ガラス フレーム:金属 / 旭市)	高橋貞雄贈
19	駒下駄 (昭和期 / 生地:木 鼻緒:綿 / 旭市)	橋本愛贈
20	団扇 (昭和期 / 骨:竹、木 面:紙 / 旭市)	菅谷信治贈
21	ハンディファン (令和期 / プラスチック / —)	個人蔵
22	浴衣生地 (昭和期 / 木綿 / 旭市)	菅谷茂正贈
23	浴衣 (昭和期 / 綿 / 香取市)	個人蔵
24	お櫃 (昭和25年 / 竹 / 香取市八筋川)	千葉県立中央博物館
25	手押しポンプ (昭和期 / 鉄 / 香取市周辺)	千葉県立中央博物館
26	手桶・柄杓 (昭和期 / 木 箍:金属 / 香取市)	千葉県立中央博物館
27	ラムネ瓶 (昭和期 / ガラス / 旭市)	旭市教育委員会
28	ガラス皿 (昭和期 / ガラス / 香取市)	個人蔵
29	ガラス製の簀 (昭和期 / ガラス / 香取市周辺)	千葉県立中央博物館
30	氷かき (昭和期 / 本体:木 刃・足:金属 / 香取市佐原)	千葉県立中央博物館
31	電動かき氷機 (平成期 / 本体:プラスチック 刃:金属 / 香取市)	個人蔵
32	かき氷椀 (昭和期 / ガラス / 香取市周辺)	千葉県立中央博物館
33	心太突き (昭和期 / 木 金属 / 香取市周辺)	千葉県立中央博物館
34	ところてん突き (令和期 / プラスチック / —)	個人蔵
35	蠅取りリボン (令和期 / 紙 / —)	個人蔵

No.	資料名(年代 / 素材 / 使用地 横線は購入)	提供 (敬称略)
36	蠅帳 (令和期 / 布、レース / —)	個人蔵
37	ハエたたき (令和期 / しゅろ / —)	館蔵
38	ハエたたき (令和期 / プラスチック / —)	個人蔵
39	蠅取棒 (昭和期 / ガラス / 香取市周辺)	千葉県立中央博物館
40	蠅取り瓶 (昭和期 / ガラス / 香取市周辺)	千葉県立中央博物館
41	蚊やり豚 (平成期 / 陶器 / 香取市)	個人蔵
42	蚊取り線香 (令和期 / ジョチュウギク 他 / —)	館蔵

企画展示室前

No.	資料名(年代 / 素材 / 使用地 横線は購入)	提供 (敬称略)
43	風鈴 (令和期 / 鉄・陶器・ガラス / —)	個人蔵
44	ハエたたき (令和期 / しゅろ 大利根分館 プラスチック / —)	館蔵
45	扇子 (令和期 / 骨:竹 面:紙または布 / —)	個人蔵
46	団扇 (令和期 / 骨:プラスチック 面:紙 / —)	個人蔵
47	ハンディファン (令和期 / プラスチック / —)	個人蔵
48	食卓カバー (令和期 / 布、レース / —)	個人蔵
49	ところてん突き (令和期 / プラスチック / —)	個人蔵
50	ラムネ瓶 (令和期 / ガラス / —)	個人蔵
51	蠅取りリボン (令和期 / 紙 / —)	個人蔵
52	虫取り網 (令和期 / 柄:竹 網:ポリエステル / —)	個人蔵

外部展示

No.	資料名(年代 / 素材 / 使用地 横線は購入)	提供 (敬称略)
	●旧林家住宅	
53	蚊帳 (令和期 / ポリエステル / —)	館蔵
	●記念館入り口	
54	蠅取りリボン (令和期 / 紙 / —)	個人蔵
55	葦簀 (令和期 / 葦、竹 / —)	個人蔵
56	簾 (令和期 / 竹 / —)	個人蔵
57	手桶・柄杓 (令和期 / プラスチック / —)	個人蔵
58	風鈴 (令和期 / ガラス / —)	個人蔵
59	水鉄砲 (令和期 / プラスチック / —)	個人蔵

大原幽学記念館

〒289-0502 千葉県旭市長部 345-2 Tel. 0479-68-4933 <http://www.city.asahi.chiba.jp/yugaku/>

令和7年度企画展「くらしの中の昔の道具～五感で感じる涼の工夫～」解説リーフレット 第1版 2025/7/23 発行